

土屋グループとクライアントをつなぐ月刊誌

広報

土づくり

JUNE

これからは愛情と安心を

つい最近、重度訪問介護を使い始めた渡邊洋介さん。洋介さんとご家族の今までを、母と弟(ホームケア土屋新潟の管理者:渡邊丈寛)のインタビューによりお届けします。



<プロフィール>

名前:渡邊洋介(46)
出身:新潟市
障害名:脳性麻痺(脳原性運動機能障害1級)、知的障害A

みんなと一緒に

洋介が小さい頃に、同じ障害者を持った家族との交流の場である『共に育つ会』に入りました。会の主旨は、「どこかの施設に入れてしまうのではなく、療育や訓練を受けながら、他のみんなと一緒に、普通の中で育てよう」というもので、会のメンバーとお互いに支えあつて私も希望を持つて育ててきました。

母が語る洋介さん
生い立ち

洋介は昭和52年に3人兄弟の長男として地元・新潟市の個人産婦人科で生まれました。その際に鉗子を使って分娩をしたんですが、今でも跡が残っているくらい強く引つ張られた感じで、その後、てんかんのような発作が出たり、首の座りも遅かったり、一般検診では発達の遅れも見られませんでした。色々な医療機関を訪ねたんですが、原因がはっきりとは分からなくて、洋介が3歳の時に、ようやく東京女子医大で脳性麻痺と診断されたんです。

洋介を受け入れてくれる幼稚園を探しながら、週に3〜4日は療育センターで、身体を動かして脳を刺激する訓練を受けていました。音楽に合わせて踊ったり、跳んだりして、楽しみながら脳を活性化するリハビリで、弟2人も一緒に参加させていましたね。



地元の小学校から養護学校へ

小学校に入学する年齢のとき、教育委員会に「どうしても地元の小学校に入れてほしい」とお願いしました。最初は断られたんですが、頑張つて掛け合つて、特殊学級に入学することになったんです。けれど設備の問題や、常に誰かが付いていてくれる環境でもなかったため、昼休みに怪我をすることもあつて、「洋介がもしこれ以上大きな障害を負うことになったら耐えられない」と、2年生の時に、設備が整っている養護学校現特別支援学校に転校を決めました。それから安心して中学卒業まで過ごすことができました。卒業後はデイサービスやショートステイを使いながら、ずっと在宅で生活しています。

洋介と一緒に

洋介は歩けるんですが、つま先立ちになつてしまうので、転びやすいんです。だから、いつも手をつないで支えています。トイレまで一緒に行ったり、階段を一緒に登ったり、お風呂に入れたり。手もうまく動かさないので、食事の時も自分で食べられないので、私があげたり。小さい時はいきなりてんかန်を起こしたりしたので、寝ている間も目が離せなくて、ずっと一緒ですね。

主人はもう亡くなりましたが昔の人だったので、自分は仕事で稼ぐか

ら、私には育児や家庭のことをやってくれと、一切手伝わない人で。3人の子は年も近いし、洋介は障害を持っていてから、小さい頃はとにかく大変でした。夕飯もまだなのにお風呂に入れないきやならないし、一人が済むとラックに乗せて、もう二人入れなきゃならない。おしめ替えもあるし、手が足りないのに、主人は見て見ぬふりして毎晩飲みに行くんです。泣きそうだった時もありますね。

でも、子どもたちはそれを見て育つたから、反面教師みたいになつて、そうしてはいけないと。なので、プラスになつてと思うようにしています。それに、主人はよくドライブに連れて行ってくれましたね。

洋介さんってどんな人？

音楽が大好きなんです。私が音楽教室でピアノの講師をしていた関係もあつて、家の中は常に音楽に囲まれた生活で、特にボサノバなど洋介の好きな音楽が流れると、身体を揺らして踊っています。三度の飯より音楽が好きという感じで、何時間でも踊つているし、盛付かると「フーツ」と声を上げて喜びます。私がエレクトーンを弾くと、なおさら嬉しがつて。頭では分からなくても、身体でもものすごく感じているんです。

弟・丈寛が語る

洋介さん

重度訪問介護との出会い



洋介とは一緒に暮らしていましたが、身の回りのことは全部母親がしていたんです。けれども、母も年を取っていくし、将来的には自分が面倒を見なきゃいけないだろうとは思っていました。とはいえ、突然洋介のことを何かやれと言われてもできないので、いずれは介護・福祉の道に進まなきゃな、というのが頭の中にずっとありましたね。それで40歳頃に重度訪問介護の会社に入社したんですが、何も分からず未経験で飛び込んだので、その当時から洋介が重訪の対象になるかどうかも分かっていなかったんです。

その後、土屋に入社して新潟事業所を任せられるようになったから、「洋介って重訪の対象なんじゃないか」って考え始めて、行政に掛け合って去年から重訪を利用し始めました。最初は短時間の居宅介護でしたが、夜中に壁にガンガン頭をぶつけたりと、見守りが必要というところで、現在は週5日、夕方7時から朝9時まで重訪を利用しています。日中はデイとシヨートも使っていて、あとは母が見ています。

家族が思うこと

親亡き後と制度

母：

何が心配かって洋介の将来のことですよね。いつまでも私が元気でいて、傍に置いて世話をしたいとは思っていますが、私もいつまでも生きてるわけじゃないし、私が死んだ後は施設に入るんだなと思って、施設に泊まる練習もしていました。それに私自身がどんな年を取っていつ、腰も痛いんですし、色々なことが負担になってきていたんです。けれど、丈寛が介護の仕事を始めて、重訪の制度を知って、

今こうして利用できたことで負担も軽減されて助かっていますし、洋介と一緒に生活が長くできるという事だから安心しました。

弟・丈寛

この仕事を始めて、脳性麻痺の人って結構多いんだなと感じました。けれど、新潟では地域性もあって、「うちにこういう子がいます」というのがなく、全然出くわさないんです。僕も障害のある兄貴がいるっていうのを、小さい時になかなか言えなくて、今でも「洋介に悪いことしたな」と、後ろめたい気持ちがあります。

けれど、母のように将来のことを不安に思っている家族は多いと思うので、母と洋介をともに重訪で助けられたように、困っている人を助けたいです。でもどこにいるんだと。いるはずなのに。新潟は特に「重度訪問つてなんぞ？」という人ばかりなので、まずこの制度を知っても

らうことだと思えますね。私もやっていけないといけないなと思います。

家族が思うこと

家族のあり方

母：

私は洋介を中心にしてきたんですよね。だから弟たちが犠牲になって、今になって行き届かなかったなと思っていて。もし洋介が障害者じゃなかったら、弟たちを塾や習い事に色々通わせたりもできたんだろうなあって。弟たちに愛情も足りなかったなあって、ずっと思ってたんです。

それで、洋介のことは、この子たちに負担を掛けないようにとずっと思っていました。弟たちは自分の幸せを求めてくれればいいと。だから最後まで、私ができる限り洋介の世話をしようと思っていたんです。けれど末の息子も地元元の社会福祉協議会に勤めてくれて、弟たちは二人とも、ちゃんと考えてくれていたんだなと、ありがたいです。今思えば弟たちを常に洋介と一緒に連れて行ったので、それが二人の生きるヒントになったのかなと思うと、悪くはなかったかなと。でも今更ながら、弟たちにも

愛情かけなきゃダメかなと思って、週に1回ほど、共働きの息子夫婦にご飯を作ったりしています。一生懸命、つぐないみたいな感じですね。

弟・丈寛

親の愛情不足みたいなのは特に僕は感じませんでしたし、そういう兄貴がいるというだけに、他の子と変わらないように育ててもらったように思っています。もつと大変で、助けが必要なお宅は世の中にはいっぱいあるし、自分が穏やかだとか、優しいってよく言われるのも、洋介の存在があったからだと思っています。コロコロナが落ち着いたら、もう十年ほど行っていない温泉旅行に家族みんなで行きたいですね。



広報・土づくりへの ご意見・ご感想



土屋グループの各種取組みについてのご意見や、当社介護サービスにおいて虐待や不当な身体拘束が疑われる場合がありましたらご一報ください。

ご意見・お問い合わせ窓口
client@care-tsuchiya.com

発行元：株式会社土屋
住所：岡山県井原市井原町192番地2
久安セントラルビル2階

